心肺蘇生法に神様は必要か？

　クレイオスの攻撃を空中で躱しながら、妖精モドキは瞬の体の上に木が落ちたのを確認すると、思わず心の中でガッツポーズをとった。

　だが今までクレイオスの攻撃は、全神経を集中させて躱してきたのだ。だから、

「余所見とは余裕だな。宮殿の召使！」

「しまっ――」

僅かでも気が逸れてしまった妖精モドキが、次に襲ってきた攻撃を避けられる道理はない。

大剣の一撃を体にモロに受け、地面に叩きつけられる妖精モドキ。手加減されていたのか、攻撃された箇所には何故か斬られた痕は無く、青痣が出来ているだけだった。

だが、じゃあ無事かと聞かれると答えはノーである。背中を地面に強く打ち付けた妖精モドキに、最早空を飛ぶだけの力は残っていなかった。

「ふっ、もう終わりか？」

「……っ！」

　飛べないまでも、せめて痛みを堪えて起き上がろうとする妖精モドキを制止するように、首に剣先が突きつけられた。後ろに退きたい妖精モドキだったが、背中が地面にくっつき、起き上がれないようにされているこの状況では、それも出来ない。

　だからだろうか。にっちにもさっちにも行けなくなってしまった妖精モドキは、「くっくっく」と低い声で笑い出す。

「……どうした？　気でも触れたか？」

「いえいえ。これはすいませんね」

　一体何を謝ったのか、理由を聞こうとしたクレイオス。

　だが、

「っ？」

　刹那、剣を捨ててその場を飛び退く。

　さっきまで立っていたその場所に、黄色い閃光が迸った。

　そしてその閃光は、倒れている妖精モドキの顔の、すぐ横に命中する。

「これは……？」

　クレイオスが、攻撃のきた方向に目を向ける。そして「ふん」と鼻を鳴らした。何故妖精モドキが突然笑いだしたのか、その理由が分かったから。

　緑色のロングコートと白いシャツ、黄色いスカートと焦げ茶色のブーツを身に纏い、肩のあたりまで伸びているウェーブの掛かった黒髪が特徴の、瞬と同じくらいの年頃の女の子。

　クレイオスも、よく知っている人物だった。

「宮殿の召使があの小僧の側にいた時から、うすうす勘づいてはいたが……やはり貴様か、ゼウス」

　攻撃のきた方向、もっと言えば、瞬が倒れているはずのそこには、一人の『神』が降臨していた。

瞬の中に存在する、風と雷の神である。

「神の下に命じます。の爪よ、の槍よ、仇なす者を切り裂き、貫け！　！」

　ゼウスは、目の前の敵に言葉を投げかけることもせず、前回テュポーンを貫いた、雷で出来た細長い槍を放つ。

　狙われたクレイオスは、その槍の一撃を片腕で弾き飛ばした。

　そんなクレイオスに向けられたゼウスの黒く光る瞳は、今やまるでメラメラと炎が燃えているかのような錯覚を覚えさせる。先程の攻撃を軽くいなしたクレイオスが、少し後ずさってしまった程だ。どうやら、相当ご立腹の様子である。

　だがその感情の矛先は、どうやらクレイオスに対してだけでは無いらしい。この場にいる、もう一人の人物。そう、妖精モドキだ。

どれほど怒っているのかは、一番最初にクレイオスを襲った黄色い閃光が、どこに、どのように落ちたのかを考えれば、自ずと分かるというものである。

ゼウスは不自然な程に綺麗な笑みを浮かべると、その問題の、今はこの場からこっそり逃げようとしている妖精モドキの方に顔を向ける。

「ねえ……後でちゃんと説明してくれるよね？」

　現在はゼウスに背中を向けているが故、妖精モドキはゼウスの顔がどんな風になっているのかは見えていない。だが、今の妖精モドキは、まさに『蛇に睨まれた蛙』という諺がぴったりと当てはまっていた。汗だらっだらになりながら、妖精モドキは壊れた人形のように何度も頷くことしか出来なかったのも頷ける。

「うん。なら、あとは……」

　それを確認したゼウスは、今度は真面目な顔で、改めてクレイオスの方を見た。クレイオスの手には、さっき捨てたはずの黒い大剣が握られている。二人が会話をしている間に、回収していたらしい。

「あなたを倒して、仲間を返してもらうだけだね」

　瞬が見たり聞いたりしていることは、当然瞬の中にいるゼウスにも見えているし聞こえている。

　なのでクレイオスが『ガデスクリスタル』を所持していることも、当然ゼウスは知っていた。

「なる程。あの小僧に『自魂蘇生術』を使ったのか」

　そしてクレイオスの方も、今のゼウスの言葉で、大体のことを把握する。ゼウスの姿を見た時から、一体どこからやってきたのか、疑問だったのだ。『神』ともなると、その存在感も『神』たるにふさわしいものになる。クレイオスどころか、もっとランクの低いテュポーンレベルでも、ここまで『神』が近づいてくれば、それが分かる程だ。

　だがクレイオスは、さっき攻撃されるまで、ゼウスの力を微塵も感じなかった。だからどうして、と思っていたのだが……それが『自魂蘇生術』の効果だ、というのなら納得出来る。

　そして同時に、クレイオスの中にもう一つの疑問が生じた。

「ゼウス。何故あんな小僧に『自魂蘇生術』など使った？」

　妖精モドキは知らなかった『自魂蘇生術』だが、クレイオスは、それがどういうものなのか、聞いたことがあるので知っていた。

だから当然、それを使った時のデメリットも理解している。

まさに『死人を復活させる術』だが、その術を使った本人をそいつの中に閉じ込めるので、自由がかなり制限されるのだ。なるべくなら使わないのが一番だし、どうしても使うのであれば、それは余程力を持った、例えばゼウスと同じ『神』と同等かそれ以上の相手に使うべきである。

間違っても人間ごときに『自魂蘇生術』を使うなど、クレイオスには理解出来なかった。一体どんな理由があったのか、クレイオスは気になったのだ。

だがゼウスは、

「教えないもん」

　そう言って、頬を膨らます。どうやら教えてくれる気は無いようだ。

　まあ敵に教える道理もないのは分かっていたから、クレイオスもさして気分を害する事もない。

　睨み合う二人の間に、一陣の風が吹き抜けた。

　戦闘が、始まる。